

ブリで早期種苗の生産に成功し、漁協と連携して製品出荷

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 水産総合研究センター
	公開日: 2024-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010005

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



ブリで早期種苗の生産に成功し、漁協と連携して製品出荷

西海区水産研究所 資源生産部

長崎大学大学院・東町漁業協同組合

研究の背景・目的

1. ブリは、我が国の海産養殖魚生産量の約半分を占め、海外へも盛んに輸出されています。しかし、その養殖用種苗のほぼすべては天然産稚魚に依存していることから、天然資源と養殖産業の双方の維持・発展のためには、人工種苗の安定生産技術の開発が必要です。
2. 平成21、22年の夏季に八代海でシャットネラ赤潮が発生し、ブリ養殖に85億円以上の被害が出ました。ブリの養殖生産を安定させるためには、赤潮被害の軽減対策も非常に重要です。
3. シャットネラ赤潮毒性はブリに大きな影響を与えますが、大きな魚より小さな魚の方が死ににくい傾向があります。そこで、通常より半年早く採卵・種苗生産を行い、1年目の夏季は小さな若魚状態で乗り切り、2年目の赤潮発生時期前までに大型の出荷サイズに仕立てる技術の開発に取り組みました。

研究成果

1. 平成25年度までに、飼育環境を制御できる陸上水槽でブリ親魚を管理し、日長と水温を変化させて8月までに冬、9月から春の環境を経験させた後にホルモンを投与し、通常よりほぼ半年早い11～12月の採卵（早期採卵）に成功しました。
2. 平成26年度には、早期採卵後の親魚を自然水温下で短日化処理をしながら8月まで飼育することにより冬を、その後に人工的な春を経験させることで、10月に採卵することに成功し、養殖用種苗を生産することができました。
3. 平成27年度には、前年に早期採卵を経験していない親魚を用いても、飼育環境条件を制御することで10月に採卵可能であることを実証しました。（図1）

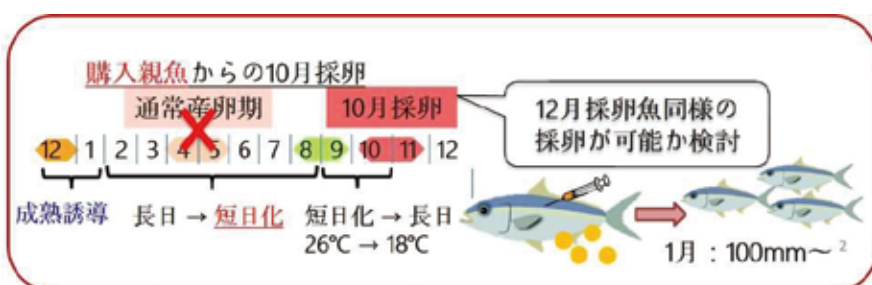


図1. 購入親魚（前年通常期産卵）を用いた10月採卵に成功



図2. 早期人工種苗（下）と同時期の天然稚魚（上）

波及効果

1. 早期採卵・種苗生産により、同時期の天然種苗より大型の人工種苗（図2）を用いることができる利点が生まれ、赤潮発生時期前に出荷サイズまで育成できるので、天然資源に悪影響を与えず、赤潮被害の軽減に繋がる養殖システムの確立が期待されます。
2. 平成27年度の成果は、親魚の前年の産卵履歴に関係なく10月採卵が可能であることを示しており、これまでの研究成果と合わせれば、周年採卵も可能になることが期待されます。
3. 鹿児島県の東町漁業協同組合では、早期生産種苗を用いた養殖試験に取り組み、「新星鰯王」として商品化しました。従来のブリの旬とは異なる“夏ブリ”としても話題となり、市場でも好評を得ています（図3）。このようなブランドの更なる創出が期待されます。



図3. 新星鰯王の宣伝ポスター（東町漁業協同組合）